向こうに見える「海の記憶」、のこころ

11月 18日 逍遥

城山と私学校跡の「陸の記憶」を背中に感じながら、ワタシは今、国道を挟んだ向こう側を眺めています。県民交流センターと長田中の間に垣間見える桜島（と言っても、猫の視力はあまり良くありませんから、例の如くボーッとですが）と、そしてここからはまだ見えにくいのですが、南の島々につながる鹿児島湾の潮風の匂い（猫の嗅覚は犬ほどではありませんが、それでも人間の数万倍はいいのです）。「この辺りにはまた、違った形の戦いの記憶も遺っているよ」と話してくれた逍遥館長さんの言葉を思い出します。

それは、「海の記憶」。南に開かれた「海」は、戦いを通じて、他藩に勝る財政力と情報収集力、そして政治力を薩摩にもたらしたのだそうです。その戦いとは、一つは「琉球侵攻」、そしてもう一つは「薩英戦争」。

まぁ、でも、猫のワタシにとっては、「陸の記憶」も「海の記憶」も、結局は、面倒で欲張りな人間の、同じ矛盾の証しでしかないんですけどね。

次回「「第三の記憶」とは、のこころ」